IV-JAPAN
NEWS【NO.4】2004.12.24 発行

＜近況報告＞

シェンクアーン県ワークショップ開催

郵政公社の助成金により、2004年12月にジェンダー、栄養と料理、環境保全、米銀行運営ワークショップをシェンクアーン県ノンヘト郡タムサイ村、タムスア村、カム郡サン村、ナーパイ村で実施しました。それぞれのワークショップに村民は関心と意欲を持って参加しました。ジェンダー訓練は、ラオスの法律における男女の平等から男女の相違点等、村民人身でジェンダー問題について考えました。家庭におけるモン族の女性の地位は低く、男性に比べよく働きます。ワークショップ後は男性も家事を手伝うようになった、とモン族の女性たちは喜んでいました。栄養と料理においては、モン族の調理方法は煮ることしか知らず、味付けも塩か化学調味料だけでした。訓練では地元で採れる食材を使用して新しい調理方法や味付けを学び、訓練後は家庭料理のレパートリーが増え、料理が美味しくなったと言っていました。今年の2月に開始予定の米銀行事業は村民の殆どが参加しますが、ワークショップでは村民自身で事業を運営し、村全体の事業であることを良く理解しました。96年からシェンクアーン県の当会事業を支援してくれている郵政公社が、ワークショップの開催期間中に2003年度シェンクアーン事業のモニタリングのため、12月15日～17日にシェンクアーンを訪れました。モニタリングの担当の方は当会の事業が草の根の村民に大変役立っていると感心していました。

ワークショップ参加したモン族の女性

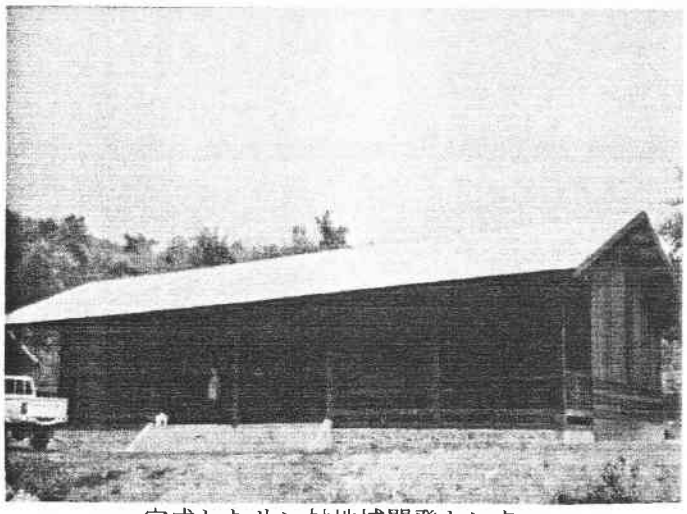
栄養と料理のワークショップ

モン族の新年恒例の求愛ゲーム

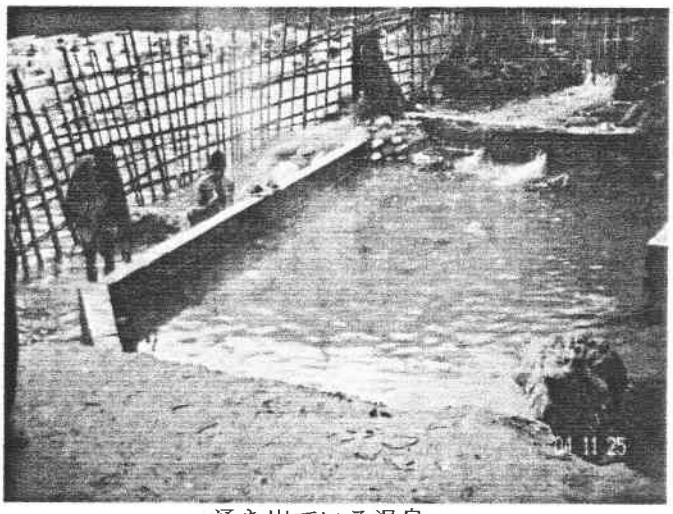
ワークショップはモン族の新年と重なった

DAP 補助金事業

当会が 2003 年度から新しい対象村として支援しているシェンクアーン県カム郡サン村のコミュニティーセンターがオーストラリア大使館の DAP(Direct Aid Program) 援助によって今年の 11 月に完成しました。12 月に実施した米銀行運営ワークショップは完成したセンターで実施できました。コミュニティーセンターの近くには温泉が湧き出ています。次年度はその温泉をシェンクアーンの観光名所の一つにし、村民の新たな収入源とする事業を実施する予定です。



完成したサン村地域開発センター



湧き出ている温泉

ラオス最新プロジェクト報告会＆ラオス民族音楽日本公演開催

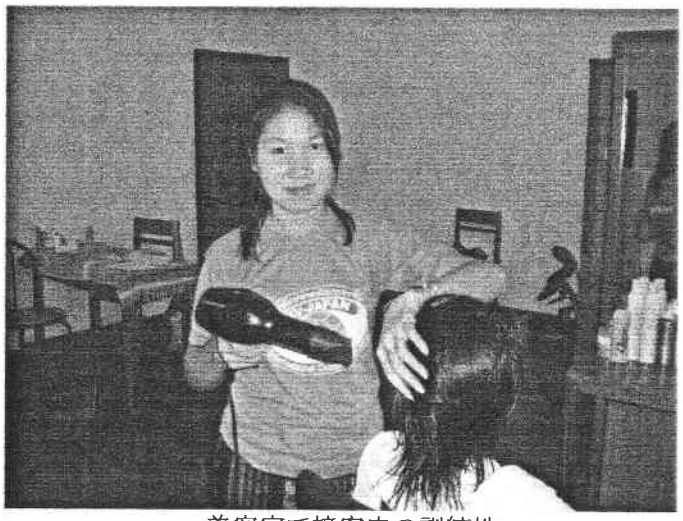
10 月 15 日に銀座十字屋ホールで、第 1 部は当会代表の冨永が帰国報告をし、2003 年に発表されたラオス貧困撲滅、国家計画と当会事業の関わりや JICA 草の根事業の職業訓練等が、パワーポイントで次々と紹介され内容の濃い報告となりました。第 2 部は今年も資生堂スタッフのにわかモデルと東京ウィルライオンズのボランティアも加わって、ラオスファッションショウが行われました。第 3 部はラオスの歌手センさんによるラオスの伝統音楽が紹介され、ラオス大使夫妻も加わってランボン（ラオスの踊り）を楽しみました。今年は 5 回目のラオス文化紹介となり、リピーターの観客には一工夫が必要でした。また、予算の関係もあり、今年は歌手１名を招聘することにしました。ラオスでは歌手といっても、ナイトクラブや結婚式で歌っている程度で、まだ本格的なプロ歌手は殆どいません。そこで、歌手探しに、ラオスで小学校建設をしている当会理事の山本氏に協力してもらい、いくつかのクラブに行きました。山本さんは学生時代に流しでバイトし、ピアノもギターも玄人並です。数カ所で数人の歌を拝聴し、白羽の矢が立ったのが、センさんです。歌唱力が一番しっかりしていました。次に、伴奏の問題です。日本でピアノやギターでと考えましたが、センさんは楽譜が読めません。これは無理もないことで、音楽大学の先生でも音符が読める人は数人しかいません。小学校の音楽教育にも踊りや歌は手拍子で習いますが、先生が出来なければ、音楽の授業はありません。センさんは聞いて覚えて歌っていますので、使い慣れたキーボードで伴奏を CD にして用意しました。アンコール用に知っている日本の歌は２曲のみ、北酒場とスバルですが、うろ覚えで、歌詞は特訓しました。日本での公演は大成功で、日本人以上に情感を込めてスバルを歌い上げました。私たちも彼女が独学でここまで歌えたことに感心しました。センさんはラオスに戻り、レパートリーが増え、喜んでいます。センさんの夫の妹が日本人と結婚していて、義理の娘と十字屋に来て、自分の国に誇れる文化があり、娘に分かってもらえたのが一番うれしかった。と、話してくれました。主催した実行委員会及び（株）十字屋、ご協力頂いた（財）東芝国際交流財団、（株）資生堂、その他の皆様に深く感謝申し上げます。

歌手のセンさん

センさんは今日のラオスをリードする代表的な歌手の１人です。貧しい家庭の５人兄弟の４番目に生まれた彼女は、14 歳の時にプロの歌手になることを決意し、独学で歌を習得し、コンテストでベストシンガー賞を何度も受賞しました。現在、彼女は家庭を持ち、一人娘に恵まれ、将来はホテルやクラブを経営したいという夢があります。彼女の夢はまだ実現しませんが、歌を通して彼女は人生に対し常にポジティブな姿勢であり続けることの大切さを学びました。「希望を持つこと」が人生にとって最もかけがいのないものであり、自分を幸せにしてくれる源であると彼女は強く信じています。日本公演が成功したことにより、夢の実現に一歩近づいた、と喜んでいました。

職業訓練：縫製・理美容・調理コース

JICA 草の根技術協力事業として実施している縫製・理美容・調理の職業訓練事業では、８月に初級・中級コースを終え、その後、上級者コースとしてオンザジョブトレーニングコースが開始されました。このコースでは、ブティック（縫製コース）、美容室（理美容コース）、レストラン（調理コース）を訓練生自身で運営し、マネージメントを実践で学んでいきます。オープン前は、価格設定やユニフォームなどについて話し合い、接客の練習もしました。その後、理美容コースを支援していただいている資生堂や、ホテル、ブティックの経営者など多くの方々のアドバイスをいただき、9 月 13 日、各店舗をオープンすることができました。オープン後は、訓練生自ら、若者に人気のイベント会場へチラシを配りに行ったり、ガイドブックやラオスのテレビ局に取り上げられるなどして、顧客も徐々に増え始めました。訓練生も顧客の要望に応える納得のいくサービスを提供できたときは、充実感を得ているようです。12 月 13 日には、ダイアナ妃のデザインも手がけたことのあるシンガポールのデザイナー、ベニー・オン氏が当職業訓練センターを視察、ブティックにオーダーもいただきました。このようにして、皆様に訓練生を育てていただいています。



美容室で接客中の訓練性

世界的なデザイナー、ベニー・オン氏と縫製コース訓練生

職業訓練：家具コース

彩の国さいたま国際交流基金の助成金により、木工家具コースの職業訓練が９月に始まりました。初級・中級コースが終了し、現在、上級コースとして、顧客からの注文をとり、作成していくオンザジョブトレーニングを実施しています。中級・上級コースでは、途上国で長年、家具の技術指導やコンサルタントを行っている松本氏を講師に迎えることができました。木工機械の寄付もあり、機材の充実を図ることができ、訓練生も就職へ向けて十分な技術を身につけることができました。

椅子を製作中の家具訓練生

指導中の家具トレーナーのエープ

日本語コースの開催

10月25日より3週間、日本語入門コースが実施されました。入門コースということで、自己紹介の仕方やレストランでの注文や買い物の仕方を重点的に学びました。受講者の中には、外国語を習うのが初めての生徒もおり、興味深かったようで、真剣そのものでした。「日本語は難しいぃ～」と言いながらも、めきめきと上達していき、早速日本人の接客に実践しています。

WIGバザーに参加

11月7日、ラオス国立大学工学部キャンパスでWIG（Women's International Group）主催のバザーが開催されました。ラオス事務所スタッフと職業訓練生も出店し、合計で約3万5千円を売り上げました。

日本語コース

ＷＩＧバザーにて

ヌーの帰国報告

埼玉県主催の海外技術研修生として派遣された当会人気者ラオ人スタッフのヌーが6ヶ月間の埼玉県での研修を終え、11月19日に帰国しました。以下は本人がパソコンで書いた報告です。

＜忘れられない思い出＞　ヌー

私が6ヶ月間の研修で学んだものは、コンピューター、コミュニティーサービス、日本語、日本人の考え方、日本の生活様式等です。

日本には私のファンが沢山いて、友達が沢山出来ました。休みの日には友達と遊びに行ったり、観光名所を訪ね、日本の文化について学んだりしました。またお茶会にも招待され茶道について学びました。私はそのお茶会に大変感激しました。その他にも日本の古都、お寺、お城を訪ねたりし日本の文化に接触しました。日本での滞在期間中ホストファミリーや友達を始め、沢山の人が私に対して親切にしてくれました。

日本人は親切で礼儀正しい印象を受け、また日本人の考え方を学ぶことはとても貴重な体験となりました。これから、私は日本で学んだことを活かしラオス人のために一生懸命働きたいと思います。私が日本で学んだ知識や技術をラオスの発展に役立たせ、ラオスでもさらに民主的で開かれた社会の実現を目指したいと思います。

最後にこの報告書を通してこの研修を運営した埼玉県の主催者、埼玉県立教育センター、深谷市立教育センター、埼玉YMCA、ホストファミリーに感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。この体験は一生忘れません。

日本のお祭りを楽しんでいるヌーと研修生たち

埼玉県入間市のホストファミリー

第７回 スタディー・ツアー

2004年10月23日～30日８日間参加者５人で第７回スタディー・ツアーを実施しました。今回の特徴は学校を寄贈した２人のドナーが参加したことです。早坂ヴィエンカム小学校と斉藤タソモ小学校を訪問し、生徒の身体測定を行ったり、日本文化紹介に各自の特技で指導しました。

青年海外協力隊で活躍中のワークキャンプOBの鈴木晶子さんの案内でルアンパバンの滝を見学

斉藤加代さんが小学校にタオルの贈呈

＜ラオス・スタディツアーに参加して＞

ルアンパバンの観光を終えて 27 日にヴィエンチャンに戻った私達は、ＩＶセンターで職業訓練生の調理コースの生徒達が作ってくれたお昼を食べてから車に乗りこんでタソモに向った。ラオスの土を踏んでから 5 日目、この旅で一番期待していたタソモ小学校の訪問である。ヴィエンチャンから続く舗装道路が切れて、わだちの跡が残るでこぼこ道になった。乾季に入って乾燥した道は車が走り去ると赤い砂煙を上げる。メコンの河の色が赤茶色をしていて驚きだったが、道もメコンと同じ赤茶けた色をしていて、道路脇の木々や草は砂煙をかぶって矢張り赤茶けていた。これが私にとってラオスを印象付ける色になった。車の通る道を時折、悠々と牛や鶏などの家畜が横切ってゆく風景はいかにものどかで、私の子供の頃、昭和 20～30 年代の田舎の風景を彷彿とさせるものだった。でこぼこ道を砂煙を上げて走ること約 20 分、白壁に緑色の窓と屋根（ＩＶのシンボルカラーと同じ）のモダンな、簡素で美しい平屋の校舎が見えてきた。小学校に到着してから、待ちかねていた子供たち一人一人に、ドナーやＩＶからのプレゼントのノートやタオルなどを渡してから、この学校のドナーである斎藤さんのプランで、１年生の体重と身長を測定をするお手伝いをした。言葉が通じなくても小さな子供たちの、好奇心に満ちた素朴で純真なまなざしを読み取るのは容易だった。貧しくとも真っ直ぐに伸びようとしているこの子供たちに、バラックのような風雨をしのぐだけの校舎の代わりに、気持ちよく勉強の出来る環境の校舎を提供する意義の大きさを感じた。翌日はヴィエンチャンから車で２時間近くかかる村にある、ヴィエンカム中学校も訪問した。初めてラオスを訪ねた私は、ラオスのゆったりとした風土や歴史や文化、そして温かな人々に触れてこの国に親しみをもつことが出来た。それと同時に国際協力の一端を垣間見ることが出来たのは普通の観光旅行では得られない貴重な体験になった。

西条美子

＜3回目のラオス訪問＞

学校贈呈式に出席してから８ヶ月ぶりの訪問でした。学校では図書室も整い、教室も大事に使用され私の友人の井上さんがプレゼントした掛け時計も無事動いていた。今回訪問の大きな目的は子どもたちの身体測定をする事です。以前富永代表から、ラオスの子どもたちは身体測定をしないので体位平均値もわからないと聞き、機会が有ればぜひ手がけてみたいと思っていました。今回は時間的なこともあり対象者は１年生だけになりました。当日の出席者は 37 人で、年齢は 3～７歳だった。これには訳があり、付き添いの弟がいたり、就学が遅れて７歳の子もいた。ただ生年月日は親の申告なのでやや不正確と思われます。子どもたちにとって初めての経験で、体重計の乗り方もわからないようでしたが、前の子の様子をよく観察していたようで、後になるほど上手になり笑顔が見られるようになりました。測定の結果、体格は日本の子供たちに比べかなり小柄でスリムです。今後は、出来れば同じ子を継続的に測定して個々の発育状況を見たり、年齢層をもっと広げて多くのデーターを集積し、何らかの成果が出せたら良いなんて思っているところです。またラオスに行く楽しみが出来ました。

斉藤加代

第７回日本文化紹介(KNOW JAPAN)

(財)東芝国際交流財団の支援で 10 月 24 日 KNOW JAPAN がラオスのＩＶセンターで開催されました。スタディー・ツアー参加者とラオス在住日本人がボランティアを務め、生け花、お茶、書道、折り紙、着付等をラオス人に体験してもらい、日本の文化について知ってもらう良い機会となりました。この模様はラオステレビでも放映されました。

書道の指導をする筆禅会の稲田盛穂さん

浴衣を着たラオス人と日本人ボランティア

生け花を指導する参加者の斉藤加代さん

西条美子さんよりお茶の点て方を習うラオス人

カノック奨学金ドナーの方々(敬称略:9 月から 12 月 24 日まで)

稲田雅子（2 口）、片岡啓子（2 口）、小林愛子、坂根昭恵、佐藤美津子（10 口）、謝花恵子（2 口）、谷本善江、百次とき、藤田カツノ

訂正：前号で斉藤加代氏の奨学金を 2 口と載せましたが 3 口の誤りでした。

運営費、寄付金、助成金等(敬称略:9 月から 12 月 24 日まで)

（一万円以下は省略させて頂きます。ご了承下さい。）

宇野薫 $100、大田基金 300.000 円、栗林トセ 100.000 円、埼玉県国際交流基金(前期分) 250.000 円、斉藤加代 50.000 円、西条美子 100.000 円、関谷綾子 152.40 円、全労済　2.500.000 円、東京練馬ライオンズクラブ 50.000 円、藤田迪江 100.000 円、富士ゼロックス 50.000 円、富士ゼロックス瑞数倶楽部 50.000 円、松本重樹 $ 100、水と大地と緑の会 300.000 円、ラオス報告・ラオス文化日本公演実行委員会 185.938 円

ご協力ありがとうございました。

幸子のラオス便り No.10（04.11.17）

《アセアンサミット開催で厳戒態勢》

ラオスが第10回アセアンサミットの議長国となり、「アセアン10カ国＋3（日本、中国、韓国）」の13カ国の元首、代表団がラオス入りのため、２００室もホテル不足で、運の悪い人は隣国タイのウドンやノンカイから通うようだと昨年から言われていた。マレーシアの中国系民間会社がメコン川の河川敷に14階建てのドンチャン・パレスを急ピッチで建設中で、建物の全容が現れてびっくり、白とオレンジのカラーで、なんとも派手はでである。有機野菜栽培をしていた河川敷を埋め立てて、景観も悪いし、誰が建設を許したのか、密かに政府批判が聞かれる。同ホテルは未だ未完成で、一昨日もテレビがトラックに満載されて運び込まれていた。サミットは１１月２９日に開催されるが、警察官の数も要所要所、確実に増え、もう既に戒厳令下の模様。以下は11月11日のヴィエンチャン・タイムス紙の抜粋：

<大型車輌進入禁止等>首相府11月2日付発令
①官庁、学校（私立も含め）は11月29日から12月1日まで休業、休校。
（注：12月2日は革命記念日で公休日なので、実質は11月27日の土曜日から、更に12月3日も休業にすると、12月5日までの長い休みとなる。都心の学校によっては11月22日から自主的に休校。）
②大型トラック、大型バスは11月22日から12月1日までヴィエンチャン都内に進入禁止。
③安全確保のため、ヴィエンチャン都は国家安全保障省と通信・交通・郵政・建設省と協力して11月22日から12月1日まで、車輌と人を検問。

<入国査証の発給一時停止（11／22～12／1）：> 外務省11月5日発令
(1) ヴィエンチャン都ワッタイ空港及びラオ・タイ友好橋での観光ヴィザ、到着ヴィザの発給は停止。他の県から入国の場合は通常通り発給。
(2) 既に滞在している数次ヴィザ及びIDカード保持者及びアセアンサミットのための入国ヴィザを保持している外国人を除き、海外のラオス大使館・領事館で入国ヴィザを既に発給されていても期間中は入国できない。

更に各村長の判断で、早いところは15日から女子は伝統衣装のシン（巻きスカート）の着用を規定し、当職業訓練にかよう生徒も皆シンをはき始め、未成年でIDカードを持たない生徒が警察官に呼び止められるのが怖いというので、急遽首から下げるIVのネームタッグを作り、皆早々に帰宅している。児童生徒は自宅待機、都民も都内進入禁止と受け止めて、親戚訪問も控えるとか。商店レストランは午後10時半閉店との通告があったとか聞いたが、暗くなると閉め始める店が多い。日本からは170人もの代表団がヴィエンチャン入りするそうだが、セキュリティのためといいながら、一般市民を接触させない、取材させないような気がする。当訓練所も11月27日～12月2日まで休校せざるを得ない。ラオスを知ってもらういい機会なのに。

《アセアン・サミットその後》　(04.12.24)

メコン河の土手の屋台や、商店街はひさしを道路に張り出して商品を並べたり、テーブルを置いて野外レストランにしていたが、通達により、全て取り払わなければならなくなり、殺風景になってしまった。道路に面していて中が丸見えの家や店屋も同じく、目隠しのために竹のフェンスで囲い、さらに白いペンキを塗った。皆、おとなしく当局の指導に従うところが怖い。サミット開催中、私も怖るおそる様子を観に町に繰り出したが、人も車も少なく、町はひっそり、期間中雇われた掃除人が毎朝清掃し、ゴミはなくきれいだ。ただし、サミット会場近くは道路が封鎖されて近づけない。やたらと警官や軍人の制服姿が目立った。仕方なくサミットの様子はラオテレビを見て理解した。日本のテレビにもラオスが毎日登場していたので、身近に感じたと皆様からメールを頂いた。唯一の英字紙「ヴィエンチャン・タイムズ」が、いつもは休刊の土日も頑張って発行した、と誇らしげに編集スタッフの写真を掲載していたが、よそでは当たり前のことがラオス事情は違う。
サミットが終わったら、マスコミも今まで経験したこともない大イベントを小国ラオスが成功させたと、自画自賛。もっとも新聞もテレビも情報文化省の官製でしかない。しかし人々は普段を取り戻し、土手の屋台も健在だ。外国のマスコミは何を伝えたのか。NHKの衛星放送を見てもあまりラオスの人々の暮らし振りは伝わってこない。日本の援助も人々の暮らしが豊かになることを願っているが、二国間援助第1位の日本はもう少し踏み込んだ関わりは出来ないものかと、日ごろ官庁対策に苦労している者は思う。

タイ奨学金ニュース

受刑中の親を持つタイの奨学金生（12歳）のサンクス・レターを紹介します。

親愛なるドナーへ

僕の名前はセンマットです。現在、僕は母と3人の弟の5人で暮らしています。僕の父は麻薬で逮捕され、8年間刑務所に務めなければなりません。僕の母は毎朝早く起きて、朝ご飯の支度と仕事の準備にかかり忙しく、僕たち家族のために夜遅くまで働いています。僕は学校が終わった後、忙しい母を手伝うため、幼稚園に通う弟や2歳の弟の面倒を見たり、母が経営している店を手伝います。母は一日も早く父が釈放され、家族みんなで暮らせることを願っています。僕は奨学金のお陰で毎日学校に通えるので大変嬉しいです。僕は勉強が大好きです。特に英語が得意で、父母の日に行われた、英語の作文コンクールでは賞をもらいました。僕はコンピューターを習い、将来は自分の会社を持ち、母を楽にすることが僕の夢です。奨学金を頂き大変感謝しています。

パタラサイ・センマット

タイ・ピブン福祉財団で受刑者の子弟のための40人分の奨学金をピブン財団理事長に手渡す富永代表、タイIV財団理事長、他関係者

＜サポート会員募集＞

奨学金ドナー及び国際協力費・運営費ドナーを随時募集しています。一人でも多くの皆さまのご協力を、宜しくお願い致します。

① 奨学金ドナー
　　年1口　12,000円以上

② 国際協力費又は運営費ドナー
　※個人　年1口　3,000円以上
　※団体及び法人　年1口　10,000円以上

申込方法：郵便振替にてご送金願います
口座番号：00140-5-537168　加入者名：カノック奨学金

11月上旬から1ヶ月半シェンクアーン県に行ってきました。標高約1000メートルのシェンクアーン県は朝夕とても冷え込みます。また、当会のセンターがある村には電気が無いので夜は特にすることが無く、暗くなれば寝て、夜が明ければ起きるという、昔から営まれた人間本来のコミュニティーと先進国の人々が回帰として追い求めているライフスタイルがここにあるのではないのでしょうか。一日の疲れを人々の笑顔と温泉で癒し洗い流せる世界がここに在ります。

当会のインターンとして働き始めて、約1年が過ぎましたが、メコン川の夕日を見ながらビールを飲んでいると、あらゆる困難を乗り越えるエネルギーが湧いてきます。みなさんにも、きっとこの素晴らしい景色が想像出来ると思います。

松島

【特定非営利活動法人　国際協力ＮＧＯ・IV-JAPAN】

日本事務所
〒331-0058　埼玉さ県さいたま市西区飯田426
TEL: 048-622-8612 / FAX: 048-625-0271
E-mail: iv-japan@cc.rim.or.jp

ラオス事務所
P.O.BOX 7920 VIENTINE, LAO P.D.R.
TEL/FAX: +856-21-26-1240
E-mail: ivjapan@laotel.com

http://www.cc.rim.or.jp/~iv-japan/